

留学生の異文化適応

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1993-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004708>

留学生の異文化適応⁽¹⁾

江 村 裕 文

I 研究の目的

来日する留学生の数は年々増加し、現在全国で4万人以上の留学生が学んでいる⁽²⁾。留学生の留学の目的が日本における勉学であるという点については異論はないだろうが、留学生在がただ勉学だけでは成り立たないことも事実である。つまり、勉学という目的を達成するには、日常生活での精神的な安定が保証されていなければならない。いかに勉学への意欲があっても日常生活面で不安や葛藤等の要因があればそれが原因で留学自体に破綻をきたすおそれがあるのである。一般に留学生の受入れという場合、日本語教育も含めた勉学の面での援助は当然のこととして視野に入っていたし受入れ体制も整いつつあると言えるが⁽³⁾、それを支える日常生活面での援助や体制となると、未だその重要性が正当に評価されているとは言いがたい⁽⁴⁾。

留学生に限らず、異文化という環境では、自分の文化では日常的であった行動様式が機能せず、無力感・喪失感・不快感等の否定的な心理状態におちいることがある。このような状態は一般に「カルチュア・ショック」と呼ばれる。Bock (1974) は「人間の適応は他の動物の適応と比べると、はるかに複雑である。人間の適応は、少なくとも3つのレベルで同時的に進行し、しかも、それぞれのレベルにおいて、目標、過程および単位を異にしている。」として、適応すべき環境を要約している。その3つとは、第1に物理的・生物的環境、すなわち自然環境への適応、第2は社会的環境、すなわち他者への適応、第3は内面的環境、すなわち自己の心理的環境への適応である。これは留学生の異文化適応にもあてはめることができる。山本 (1986) によると、異文化環境への適応は、同一文化内の新しい環境への適応とは本質的に異なる側面を持つ。例えば Bochner (1972) は留学生が異文化での大学生生活に適応していくためには次の4つの課題があるとしている。

2

- (1) 外国人として、その国あるいは地方の文化様式を身につけていくという課題。
 - (2) 新入生として、新しい大学に入ったときに生じる変化に対処していくという課題。
 - (3) 目標の達成を目指して、個人として成長・発達していくという課題。
 - (4) 民族的背景や国家情勢に対して敏感な、自国文化の代表としての課題。
- これを見ると、留学生の課題はかなり重層的で複雑であることがわかる。

さて、日本における異文化適応に関する研究には、身体・心理健康面、対人関係面等、異文化の人間が適応にいたるまでに遭遇する諸問題を調査し、その多面性を明らかにしたものもある（稲村（1984）、山本（1986）等）。また、異文化適応に特徴的な諸現象を探究するための研究も行われている（上原（1988）等）⁶⁾。

本研究は、主に上原（1988）の研究がある大学の留学生の場合にあてはめて調査したものである。したがって本研究の目的も、上原（1988）と同じく、多側面にわたると考えられる留学生の適応問題にはどのようなものがあるのかを調査することである。

II 調査方法

1. 調査対象

ある大学の留学生 365 名のうち、アンケート用紙に回答した96名を対象とした。

2. 調査時期

1990年12月に送付し、回収期限を1991年1月末日とした。

3. 調査手続き

調査はアンケート用紙を郵送する方法によった。

4. 調査内容

まず、上原（1988）にしたがい、留学生の適応には以下の7つの領域があると仮定した。

- (1) 学生としての新しい環境への適応（学習・研究領域）
- (2) 環境への心理的・身体的適応（心身健康・情緒領域）
- (3) 外国語習得（言語領域）

表 1 留学生の適応状況 記述統計

		まったく あてはまらない	どちらか とという	あてはまる	よく あてはまる	非常に あてはまる	回答 数
分野	学習・研究						
	1. 私は最近勉強する気があまりしない。	40.6	28.1	17.7	9.4	3.1	1.0
	2. 私はこの大学での研究や勉強が楽しい。	10.4	29.2	29.2	13.5	16.7	1.0
	3. 私は最近、研究や勉強にいっしょうけんめい努力している。	13.5	17.7	29.2	15.6	21.9	2.1
	4. 私はこの大学での研究や勉強を続けていく能力に自信がない。	54.2	20.8	13.5	8.3	2.1	1.0
	5. 私はこの大学への留学目的と研究目的がわかっていない。	6.3	11.5	26.0	26.0	28.1	2.1
	6. 私は最近、この大学での自分の研究や勉強に価値があるかどうか疑問に思う。	36.5	29.2	16.7	8.3	8.3	1.0
	7. 私は自分の研究（研究計画）や勉強が思うように進まない。	19.8	31.3	27.1	14.6	5.2	2.1
	8. 大学で私が取っている授業は、私の研究や勉強には役に立たない。	50.0	25.0	12.5	6.3	6.2	2.1
	9. 私は今学期自分の取った授業に満足している。	15.6	25.0	30.2	20.8	4.2	4.2
分野	目標						
	10. 私は自分の専門分野の授業が理解できないでイライラする。	35.4	30.2	16.7	10.4	4.2	3.1
	11. 私は自分の専門分野の授業で、日本語で研究発表をしたり、討論したりすることに自信がある。	18.8	31.3	26.0	9.4	11.5	3.1
	12. 私は自分の専門分野の本や資料を読んでもわからないので困っている。	49.0	31.3	11.5	7.3	0.0	1.0
	13. 全体として、私はこの大学での自分の研究や勉強に満足している。	7.3	29.2	28.1	20.8	12.5	2.1
心身健康・情緒	1. 私は最近大変疲れている。	13.5	22.9	27.1	26.0	9.4	1.0
	2. 私は最近疲れがひどい。	27.1	37.5	16.7	8.3	10.4	0.0
	3. 私は最近よく眠れない。	51.0	25.0	11.5	9.4	3.1	0.0
	4. 私は最近よくホームシックにかかる。	45.8	29.2	12.5	5.2	6.3	1.0
	5. 私は最近イライラしがちだ。	37.5	27.1	18.8	10.4	5.2	1.0
	6. 私は最近何となく不安になることがある。	16.7	30.2	22.9	22.9	6.3	1.0
	7. 私は最近抑鬱気味になった。	58.3	22.9	9.4	7.3	1.0	1.0
	8. 私は最近、性的欲求不満がある。	59.4	21.9	11.5	4.2	1.0	2.1
	9. 私は最近感情の変化が激しい。	52.1	16.7	18.8	5.2	5.2	2.1
	10. 私は最近寂しくなることがよくある。	32.3	33.3	15.6	9.4	8.3	1.0
対人関係	1. 私は自分の心理的、精神的生活上のことでも悩んでいる。	60.4	17.7	10.4	4.2	5.2	2.1
	2. 私は大学になんでも話せる日本人学生の友だちがいる。	47.9	18.8	13.5	8.3	9.4	2.1
	3. 私は大学になんでも話せる留学生の友だちがいる。	19.8	21.9	29.1	15.6	19.8	1.0
	4. 大学の外になんでも話せる日本人の友だちがいる。	27.1	18.8	18.8	15.6	17.7	2.1
	5. 私は私の指導教員に親しく相談することができない。	32.3	29.2	18.8	11.5	4.2	4.2
	6. 私は私のチューターに相談することができない。	22.9	26.0	19.8	7.3	4.2	19.8
	7. 私は私の学部の先生たち（教授・助教授・講師等）に気軽に話しかけることができない。	31.3	28.1	20.8	10.4	3.1	6.3
	8. 私は大学の事務の人たちに気軽に話しかけることができない。	37.5	22.9	24.0	6.3	7.3	2.1
	9. 私は私の指導教員の研究指導に満足していない。	33.3	27.1	16.7	5.2	5.2	12.5
	10. 私は大学に私の研究（勉強）について、充分に話し合える教師がいて満足している。	32.3	27.1	15.6	9.4	8.3	7.3
文化	1. 私は最近対人関係の問題で悩んでいる。	44.8	30.2	13.5	6.3	4.2	1.0
	2. 私の学部の学生は私の研究（勉強）を熱心に助けてくれない。	32.3	25.0	25.0	9.4	5.2	3.1
	3. 私は日本人の友だちの家を訪ねることがよくある。	40.6	22.9	12.5	10.4	12.5	1.0
	4. 日本人の友だちがよく私の家へ遊びにくる。	42.7	25.0	18.8	6.3	7.3	0
	5. 私は、日本人学生といっしょに集団活動（パーティー・ダンス・ピクニック・ミーティング・スポーツ等）をする機会が少なく不満だ。	43.8	24.0	16.7	5.2	8.3	2.1
	6. 私は日本人とあまりつきあおうとは思わない。	63.5	13.5	17.7	4.2	0	1.0
	7. 全体として、この大学での人間関係に満足している。	26.0	28.1	24.0	9.4	9.4	3.1
	1. 私は日本人のあいさつや礼儀がわからなくて困ることがある。	36.5	35.4	15.6	11.5	1.0	0
	2. 私は外国人で目立つので自分の行動が嘲弄されているように感じる。	35.4	27.1	16.7	9.4	9.4	2.1
	3. 日本人は集団意識が強いので、私が彼らの集団に同じように参加することはむずかしい。	20.8	22.9	16.7	22.9	15.6	1.0
住居・心地・経済	4. 私は日本人の表現が直道でなく、間接的なので時々イライラすることがある。	17.7	22.9	27.1	15.6	16.7	0
	5. 私はまだ日本社会の特性はあまり理解できていない。	25.0	36.5	21.9	11.5	3.1	2.1
	6. 私は日本人の特性はあまり理解できていない。	24.0	37.5	22.9	11.5	3.1	1.0
	7. 日本に来る前に、日本についての情報はあまり得られなかった。	25.0	25.0	16.7	17.7	14.6	0
	1. 私の現在の住まいの住みこちは非常に快適で満足している。	26.0	32.3	13.5	10.4	15.6	2.1
	2. 住まいの衛生状態は非常によい。	9.4	29.2	24.0	16.7	19.8	1.0
	3. 私の住んでいるところの治安状態は非常によい。	5.2	15.6	24.0	28.1	26.0	1.0
	4. 私はここでの近所づきあいがとても親しい。	28.1	30.2	16.7	10.4	14.6	0
	5. 私は当地の気候はとても耐えられない。	65.6	15.6	13.5	3.1	2.1	0
	6. 私は家賃が高くて生活が苦しい。	24.0	26.0	21.9	12.5	17.7	0
	7. 私は現在、財政的にとても困っている。	18.8	27.1	19.8	17.7	16.7	0
	8. 全体として、私は当地での生活に満足している。	14.6	30.2	29.2	16.7	7.3	2.1

- (4) 人間関係での適応（対人関係領域）
- (5) 異なる文化様式への適応（文化領域）
- (6) 住民・自然環境への適応（住居・自然環境領域）
- (7) 経済環境への適応（経済環境領域）

これらの7領域における留学生の適応度を測定するために、Baker (1981) の FSA の尺度を上原 (1988) が改定して用いているものを用いた。この尺度の質問項目は56である。回答は、各項目を「非常によくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階評価を用いて評定してもらった。また、これらの質問項目のうちで最も困っている問題を5つ選んでもらった。さらにこの尺度にあげてない問題もあると考え、それ以外の問題について自由に書いてもらう欄をつくった。質問項目の具体例は表1の「記述統計」の細目を参照されたい。

III 調査結果

1. 対象の特徴

大学の国際交流センターで入手した名簿に記載されていた学部留学生、大学院留学生等全365名に、アンケート用紙を切手貼付の返信用封筒をそえて郵送配付したが、3名が宛先不明で用紙そのものが返送され、結局宛先に届いた362名のうちアンケートに回答してくれたのは96名であった。回収率は26.52%であった。

対象者中、65名(67.71%)が男性で、31名(32.29%)が女性である。住居に関しては、61.5%の者がアパートに住み(マンション(15.6)下宿(5.2)を含めると82.3%)、4.2%の者が借家、宿舎(寮を含む)が5.2%である。一戸建てと答えた者が1名いた。

出身国・出身地域は表2の通りである。ほとんどがアジア地域出身で、中でも中国と台湾とをあわせると53.8%と過半数を超えている。次いで韓国が多く(17.7%)、マレーシア・香港・マカオ・インドネシアと続いている。アジア以外ではイラン・オーストラリア・フランス・アメリカが各1名ずつである。

調査時までの滞日期間は表3の通りである。2年未満が5.2%と少ないが、2年から3年までが一番多く31.3%であり、2年から5年までで79.3%とほぼ8割がこの期間である。

表 2 留学生出身国別分布

N=96

	学 部	大 学 院
中 国 (大陸)	22 (4)	10 (1)
台 湾	22 (13)	2 (0)
韓 国	15 (7)	2 (0)
香 港	5 (1)	
マ レ ー シ ア	10 (4)	
マ カ オ	2 (0)	
イ ン ド ネ シ ア	1 (0)	
イ ラ ン	1 (1)	
オーストラリア	1 (0)	
フ ラ ン ス	1 (0)	
ア メ リ カ		1 (0)
不 明	1 (0)	
合 計	81 (30)	15 (1)

() 内女性の数

表 3 留学生の調査時までの滞日期間

N=96

期 間	人 数	%
1 か月～6 か月	0	0.0
7 か月～1 年	1	1.0
1 年1 か月～2 年	4	4.2
2 年1 か月～3 年	30	31.3
3 年1 か月～4 年	23	24.0
4 年1 か月～5 年	23	24.0
5 年1 か月～6 年	11	11.5
6 年以上	4	4.2

8 割以上が学部学生 (83.3%), 他に大学院の修士課程 (9.4), 博士課程 (3.1) が1 割強, あとは研究生・聴講生 (3.1) である。来日前の職業は, 高校生 (27.1%), 大学生 (15.6%), 大学院生 (2.1%) と, 学生だった者が 44.8% とだいたい半分を占め, 教師 (2.1%), 研究者 (6.3%) を加えると 53.2% と過半数である。他は主に会社員であったと回答している (37.5%)。

表 4 日本語学習歴

N=96

期 間	人 数	%
1 か月～6 か月	3	3.1
7 か月～1 年	13	13.5
1 年1 か月～2 年	21	21.9
2 年1 か月～3 年	18	18.8
3 年1 か月～4 年	13	13.5
4 年1 か月～5 年	5	5.2
5 年1 か月～6 年	7	7.3
6 年以上	12	12.5
不 明	4	4.2

あとは無職・その他で9.3%である。

日本語学習歴は表4の通りである。6か月までが3.1%と若干見られるが、多くは7か月以上で4年までの者が67.7%，また6年以上と答えた者が12.5%あった。海外滞在経験は80.2%の者が無しと答えており、ほとんどの対象者にとっては今回の来日が初めての外国生活の経験であったことがわかる。

2. 留学生生活の諸領域における適応問題

今回の研究目的、すなわち留学生が適応過程でどのような問題に直面しているかを調べるため、Ⅱの4.で述べた日常生活の7つの領域に分けて調査した結果を表1の「記述統計」にあげる。以下では各質問に対象者の25%以上が不適応を示していると答えた項目を中心にまとめる。

「学習・研究」領域では、全体としてこの大学への留学を肯定的に評価している。留学目的も明確であり、研究や勉強に努力をし、研究や勉強が楽しいという結果が出ている。しかし「勉強する気がしない」「研究や勉強に価値があるかどうか疑問に思う」というような回答を見るとかなりの者が現状に疑問を感じているようである。また8割近くが「研究や勉強が思うようにすまない(78.2)」と感じているが、「授業が理解できない(61.5)」と併せて考えると、これが主に言語の問題なり学習能力そのものなりに起因するのか、それとももっと別の要因があるのかは明確ではない。

「心身健康・情緒」領域では、85.4%が「健康である」と回答しているが、

「疲れがひどい (72.9)」「イライラしがち (61.5)」「不安になる (82.3)」「感情の変化が激しい (45.9)」「寂しい (66.6)」等、個々の項目では問題があるという回答も多い。「心理的、精神衛生上のことで悩んでいる」に対して「まったくあてはまらない」という回答が60.4%であったが、残りの4割は何らかの意味で悩みを抱えているのである。

「対人関係」領域では、大学での人間関係に満足していないと26.0%が回答している。友人関係では「大学内に日本人学生の友人がいない」が47.9%、「留学生の友人がいない」が19.8%でかなり孤独な学生生活を送っていることがわかる。また63.5%が日本人とつきあう気があると答えているにもかかわらず、「学生たちに気軽に話しかけることができない (64.6)」「先生たちに気軽に話しかけることができない (62.4)」「事務の人たちに気軽に話しかけることができない (60.5)」と関係づくりがうまくいっていないようである。日本人の家庭を訪問したり、日本人が自分の部屋に遊びに来る等の機会は4割強が「ない」と回答している。また「日本人と集団活動をする機会が少ない (54.2)」という不満もある。

「文化環境」領域では、ほとんどの項目について問題があるという結果が出た。「日本人は集団意識が強い (78.1)」「表現が間接的 (82.3)」ととまどいが見られ、4分の3が日本や日本人の特性について理解できていないと回答している。また来日前に日本についての情報が得られたのは4分の1とかなり少ない。

「住居・自然環境」領域では、「近所づきあいが難しい (71.9)」という声はあるものの「住みごこちに満足している (71.8)」「衛生状態はいい (89.7)」「治安状態はいい (93.7)」とおおむね満足しているようである。

「経済環境」領域では、「家賃が高い (76.1)」「財政的に困っている (81.3)」とほとんどが経済的に問題を抱えているようだが、83.4%は「当地での生活に満足している」と回答している。

この結果から見ると、留学生は、経済的には苦しいが一応満足した学生生活を送っているようである。だが、自分なりの目的を持って来日はしたものの、日本での生活や文化についてそれほど理解していないことが原因で日本人や日本社会とのつきあいがうまくいかず、勉学面でもこれでいいのだろうかという悩みを持つにいたるといった経緯が見えてくる。

次に、これらの質問項目のうちで最も困っている問題を5つ選んでもらった

表 5 留学生が最も困っている問題

N=96

問 題	頻 度	%
1. 家賃が高くて生活が苦しい。	23	24.0
2. 私は現在、財政的に非常に困っている。	16	16.7
3. 研究や勉強が思うようにすすまない。	10	10.4
4. 自分の行動が制限されているように感じる。	10	10.4
5. 対人関係の問題で悩んでいる。	9	9.4
6. 集団に参加できない。	9	9.4
7. 日本人の表現が率直でない。	9	9.4

が、その結果を表5に示す。第3位第4位が同数、第5位から第7位も同数なので総計7問題を掲げる。上位2つが経済問題、次いで勉学問題、文化・コミュニケーション関係の問題である。これは、上原（1988）の場合は、コミュニケーションの問題が上位で次に経済問題、勉学問題、心理の問題であったが、この差は、対象の大学が国立大学と私立大学であったという点にあると言うことができるのではないだろうか。当然これらはその順位が問題というよりも、留学生にとっての深刻な問題として検討すべきであろう。

各領域別に自由に記述してもらった内容では、【V】の経済問題が10と最も多かった。これはただ生活費の問題にはとどまらない深刻な事情がある。生活費が高いからアルバイトをせざるを得ない。アルバイトをすると勉強する時間が足りなくなる。勉強する時間が足りないから授業についていけない。助けてもらおうと思っても日本人学生と親密になるには年齢や話題のギャップ、文化的な問題があってなかなか友人がつかれない。といった悪循環に陥ってしまうのである。他にもアパートを借りるのに困ったとか、日本人学生が不真面目だと感じたという回答、「日本に対してなじみを感じない」「日本での生活はいやになってきた」とかなり深刻な状況の留学生もいることが判明した。

次に、そのあとの欄で、自由に書きたいことを書いてもらったが、それを次にあげるようにいくつかのカテゴリーに分けてみた。それぞれのカテゴリー毎に人数もあげる。「大学生活・勉学に関して」19名、「大学生活・日本人学生に関して」4名、「大学生活・先生に関して」1名、「日本人学生との関係等コミュニケーションに関して」17名、「自分自身の精神衛生等の問題に関して」3名、「奨学金等経済問題に関して」12名、「一般的制度上の問題に関して」6

名、「その他」2名。最後にこの調査に関して7名が記述してくれた。多いものから順に並べると、「大学生活に関して」「日本人学生との関係等コミュニケーションに関して」「奨学金等経済問題に関して」となり、先に述べた問題とほぼ重なる。

IV まとめと課題

本研究の目的は、ある大学の留学生がどのような適応状況にあるのかを調査することであった。「記述統計」を分析した結果、多くの留学生が困っている問題は(1)経済問題、(2)勉学の進み具合、(3)日本人の集団志向・閉鎖的態度とそれに伴う対人関係の問題、(4)日本人の婉曲な表現の問題であった。

自由記述の分析の結果、彼らが困っている問題は、(1)日本での大学生活における問題、(2)日本人とのコミュニケーションの問題、(3)奨学金等の経済問題であった。

かりに日本語教育という立場から見ると、この結果から考えると、実は二つの目的を考慮しないといけないのではないかということが指摘できる。一つは大学での勉学のための日本語をいかに指導するかということである。つまり大学での講義・授業についていきゼミで発表したり議論したりするための日本語力の養成である。もう一つは日本人とのコミュニケーションのための日本語で、これには当然日本語という言語の問題のみならず日本人との付き合い方等の文化的な問題が関わってくる。これは日常生活での精神安定をもたらすという意味でも、日本社会における自らのアイデンティティの確認のためという意味でも不可欠なものであろう。

文化理解という点では、来日前に日本や日本の生活についての情報が得られるような方策が必要であろうし、来日後も当然起こる異文化不適応症状をより軽くするための対応を考えるべきであろう。またせっかくの留学が、極端な言い方をすれば、わざわざ反日家を育てるというようなことのないよう、一部で指摘されているようなアジア人に対する差別の問題等は日本人側の問題として解決すべき問題である。

経済面では、奨学金制度の充実や勉強の邪魔にならない程度のアパートの情報提供等が考えられなければならないだろう。

最近の新聞によると⁽⁶⁾、留学生の受入れは数の面に関しては予想以上のペー

スで進行しており、今後は留学生と受入れ体制双方の「質的充実」が問題であるとの報告書が提出されたそうである。つまりこれからは質の高い留学生を受け入れていくための方策を考えていくべきであると同時に、受け入れる日本人側の質も問われているのだということを忘れてはならないということが改めて確認されたのだと、私は評価したい。

あとがき

私は機会あるごとに、留学生の生活面の支援体制を充実する必要性について説いてきたつもりである。しかし、「研究の目的」でも述べたように、大学関係者でもこの主張を真に理解してくれる人はまれであった。留学生は勉学に必要な日本語の手当てでもしておけばよい、大学としてはそれで責任を果たしたことになるという発想の人が多いことにも驚いた。一部には理解を示してくださる方もあるにはあったが少数であることは否めない。

大学で留学生に日本語を教える教師というものは、「留学生のための日本語教師」というよりも、留学生の立場から日本人に対してものを言う「日本人のための留学生担当教師」であるべきだという思いは日々強くなるばかりである。

《注》

- (1) 本稿は平成2年度法政大学特別研究助成金による。

なお、本稿では、例えば「異文化」というときの「文化」とは何か、その「文化」が「異なる」とはどういうことか、といった術語の定義は厳密には行っていない。これらに関する議論は稿をあらためたい。「適応」に関して「個人が社会等の環境と調和した関係を保つこと」といった意味で用いている。

- (2) 文部省(1992)の報告によると、1991年5月1日現在の留学生数は45,066人である。

- (3) 水谷(1990)では主に留学生に対する日本語教育上の問題点を議論している。

- (4) 江村(1992)は、大学の国際化という観点から留学生に対する言語としての日本語の指導以外の領域の指導の必要性を主張し、またその実践例を紹介している。

- (5) 外国人留学生の適応問題に関しては、これまでの研究を概観しコンパクトにまとめた高井(1989)がわかりやすい。また、異文化間コミュニケーション全般については、西田(1988)がよくまとまっていて参考になる。

- (6) 1992年7月18日付けの読売新聞による。記事によると、この「21世紀を展望した留学生交流の総合的推進について」と題された報告書は、わが国の留学生政策

のあり方を検討してきた文部省の調査研究協力者会議（座長・川野重任東大名誉教授）が17日に鳩山文部大臣に提出したものである。

文 献

- Baker, R. (1981) FSA (Freshman's Scale for Adjustment). A research manuscript. Clark University.
- Bochner, S. (1972) "Problems in Culture Learning" In S. Bochner & P. Wicks (eds.) Overseas Students in Australia. New South Wales, New South Wales Univ. Press.
- Bock, Philip K. (1974) "Modern Cultural Anthropology: An Introduction" (江洲一公訳 (1977)『現代文化人類学入門』講談社学術文庫)
- 文化庁 (1987)『日本人と外国人』「ことば」シリーズ 26
- 江村裕文 (1992)「法政大学における留学生教育」日本国際教育協会『留学交流』Vol. 4, No. 1 ぎょうせい
- 星野命 (編) (1980)『カルチャー・ショック』現代のエスプリ 161 至文堂
- 星野命・斉藤耕二・菊池章夫 (編) (1983)『異文化との出会い』川島書店
- 星野命・斉藤耕二・菊池章夫 (編) (1987)『異文化とのかかわり』川島書店
- 稲村博 (1980)『日本人の海外不適応』NHKブックス
- 稲村博 (1984)『海外在住から帰国した邦人及び在日外国人の不適応現象とその対策に関する研究』昭和56～58年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 近藤裕 (1981)『カルチャ・ショックの心理』創元社
- 水谷修 (1990)「留学生と日本語教育」異文化間教育学会『異文化間教育』4 アカデミア出版会
- 文部省 (1992)『我が国の留学生制度の概要』文部省学術国際局留学生課
- 西田ひろ子 (1988)「異文化間コミュニケーション研究の現状と問題点」辻村明・金岡基編著『異文化との出会い』北樹出版
- 高井次郎 (1989)「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要』第36巻
- 上原麻子 (1988)「留学生の異文化適応」『言語習得及び異文化適応の理論的・実証的研究』広島大学教育学部
- 山本多喜司 (1986)『異文化環境の適応に関する環境心理学的研究』昭和60年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書